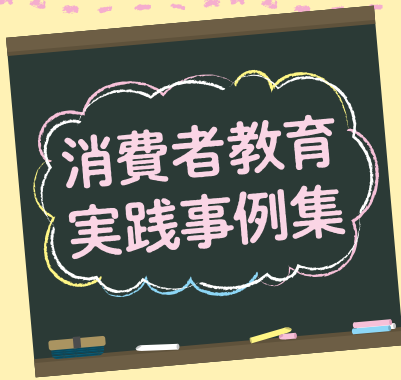


よりよい消費生活のために、 消費者の声を企業に届けよう —私たちの制服を改善してください—

多田 江利子 Tada Eriko 岩手県立紫波総合高等学校教諭

家庭科を担当。大学院在学中に持続可能な社会やシチズンシップ教育に触れ、エコバッグから考える持続可能な社会、消費者教育、地域創造、復興教育などの授業を行っている。



2012年に消費者教育推進法が制定され、消費者市民の育成に基づいた消費者教育の充実が求められています。その指導例には、フェアトレードや児童労働、ファストファッションなどが題材に挙げられていますが、生徒にするとどれもが「他人事」であり、遠い世界の出来事です。

身近で普段の暮らしに欠かせないものを題材にしたいと考えていたところ、制服を題材として、制服製造業者(以下、製造業者)に来校してもらい、共同授業をすることになりました。きっかけは、制服に退色しやすいなどの問題があり、学校として製造業者に品質を問い合わせた際に、誠実な対応をしてもらえたことでした。この授業は、私が2019年3月まで勤務していた前任校の岩手県立千厩高等学校(以下、本校)の家庭専門教科「消費生活」で実践したものです。

生徒および授業のねらい

本校は、普通科、農業系の生産技術科、工業系の産業技術科の3学科があり、「消費生活」は生産技術科生活科学コース3年生20名が受講します。単位数は2単位で2時間連続の授業です。

本授業は4時間構成で行いました。着心地のよい制服にするために、生徒が製造業者に制服の不具合を申し出るとともに学校に意見を提案する学習を通して、消費者市民社会における消費者の役割を理解し、主体的に社会に参画し行動する態度を身に付けることを目標としました。

授業の内容

①グループで制服の問題点を話し合う

自由主義経済では、消費者が選んだ物が市場

に残るシステムですが、学校の制服は着装する生徒の意思が反映されにくい面があります。しかし、消費者には8つの権利と5つの責任があり、制服であっても消費者の苦情や意見は伝えるべきだと考えました。そこで、生徒には、制服について困っていること、どのような生活場面で不具合が生じるのか、その時どう思ったのか、調べてもらいたいことはあるのか、自分の希望は何かを具体的にレポートにまとめてもらいました。そして、この内容を製造業者の前で発表することとし、どのように表現したらよいかグループで話し合わせました。生徒からの制服に関する意見には次のようなものがありました。

- 制服の色が退色する
- スカートのプリーツがとれ外見が悪い
- プリーツの手入れが面倒くさく難しい
- シャツがゆったりしたデザインで、だらしなさや着古した感じがする
- 夏服のベストの素材がアクリルで暑い
- 肩パッドが大きく着にくい
- 校章のバッジが取れやすく、引っかかって痛い
- 家で洗濯できたらいい
- (女子生徒から)夏服にポケットがなく、ハンカチ等を入れられない。活動性の向上と防寒のためにパンツが欲しい

まとめた内容は事前に製造業者に渡しておきました。製造業者は学校での生徒のようすを観察したり、実際に着ている制服を借りたりして分析を行いました。

②製造業者からは制服の改定案が

共同授業当日、製造業者から会社の経営方針、制服を作るうえで大切にしていることや製造過程、社会貢献、社会的責任の説明がありました。

次に制服の問題点を生徒が発表しました(写真1)。

写真1 生徒の発表のようす



写真2 製造業者から改定案の提示



そして、製造業者からは問題点を解決するための制服の改定案として、寸法や素材の見直し、気づかれない程度の変更などの提案があり、サンプルも提示されました(写真2)。それを試着してみると、驚くほど着心地よく改善されていました。機能性を向上させるために、新しい繊維製品が開発されており、テクノロジーが私たちの生活を豊かにしていることも分かりました。また、着こなしのアドバイスもしてもらいました。

さらに、制服は私服と違って個人の自由度が低く、学校側からの要望はあっても、着ている生徒から直接意見を聞く機会はなく、生徒からのレポートはとても新鮮だったこと、消費者からの苦情や要望は、消費者の意向を知ることができる貴重なデータであり、今後の制服作りに必ず役立てたいとのコメントがありました。

③学校への提案で制服が改定されることに

最初は、企業に意見するなんて、クレマーのすることだと批判的だった生徒でしたが、消費者の声を適切に企業に届けることの意味を確認できました。企業はよい製品を作り、消費者も適正な選択をすることでよりよい消費生活につながると実感した授業でした。

この授業後、制服の着装上の問題点と、製造業者とともに考えた制服改定の提案が生徒から学校へ出されました。それを受けて、創立120

周年となる2021年に制服がマイナーチェンジすることになり、自分たちの行動により社会が変化することを体験できました。

④生徒の感想

- ・制服はこんなにも多くの人たちが手間を惜しまずに1つずつ丁寧に作っていると初めて知った。学生の目線で細部にわたってデザインや性能が考えられていて感心した。もっと大切にしようと思った。生産者と消費者が直接お互いの声を聞き合うことは貴重で大切なことと感じた。
- ・消費者の声はすぐに製品に反映できないと思っていた。ましてや制服は学校指定だから着づらくてもしかたがないと。私たちの声を丁寧に聞き取り、サンプルを作って改良してくれて感動した。この授業で制服が改善され後輩が快適に学校生活を過ごせることになってうれしい。
- ・家庭で洗濯できる生地や伸縮性のある裏地にすれば性能は向上するが、価格は1,000円ほど値上げになるそうだ。でも3年間クリーニングに出す場合を考えれば、かえて安い。値上げの理由を知り、総合的に判断して評価する必要があると思った。

社会への参画意識が高まる効果も

消費者市民社会の学習に学校の制服問題はとてもよい教材でした。生徒へのアンケートの結果、「消費生活」の授業を受けた生産技術科の生徒からは、社会への参画意識の高まりを感じました(図)。暮らしを創造するのは自分たちだという当事者意識が生まれ、授業だけでなく、日々の生活について、問題意識をもって前向きな改善策を述べられるようになりました。

図 生徒の社会への参画意識(学科別)

